

心月輪を詠んだ一品経歌について（上）

一、はじめに

――一、本稿の取り扱う対象について

筆者はさきに発表した拙稿^①において、密教の観法である「月輪観」を扱った釈教歌を採り上げて検討と考察を試みたが、そこで対象としたものは東密（真言宗）系の用例のみであり、「おわりに」にも記したごとく、天台系の「月輪観を用いた一品経詠」については「今後追究すべき課題」（五二頁）とするに留めた。そこで本稿ではかかる天台系の用例――以下、私に「法華経系月輪観詠」とする――について見てゆこうとする。具体的にはまず、著名な例として西行の二首を採り上げ、そこから考えられる問題点について述べる。次いで検討と考察に移るが、紙数の都合により、本稿では「上篇」として、用例の濫觴及び内容的な特徴について言及した上で、東密系の用例との比較も行いつつその教学的根拠の解明を試みることとし、「下篇」において、かような詠み方が成立し、かつは定着していった要因を追究してゆこうとするものである。

る。

――二、西行の例による「法華経系月輪観詠」の紹介及び、通説の問題点について

西行（僧名「大本房円位」一一一八―一一九〇）の一品経「法華経二十八品」を指す――を詠んだ釈教歌のうち、「有明の月」「月」を詠んだ例について、山田昭全氏の『西行の和歌と仏教』に以下のような記述がある。

※歌を含めた引用は、すべて同書に拠る。また本稿における歌番号は原則として『新編国歌大観』のものを用いることとする。

①『御裳濯河歌合』卅三番（六五、六六番歌）判詞は俊成に

†大阪産業大学 全学教育機構 非常勤講師

草稿提出日 2月26日

最終原稿提出日 3月20日

†但馬貴則

よる)

卅三番 左持

わしの山思ひやるこそとほけれど心にすむぞ有明の月

右

あらはさぬわが心をぞうらむべき月やうときをば捨の山

二首の釈教の心、左は靈鷲山を思ひ、右はをば捨山をおもへり、

天竺和国雖異、所詮心月輪を觀ぜり、歌のしなも又同じ、仍為持（俊成の判）

←

…月を素材にしつつ真言密教に言う「月輪觀」を詠んだ歌である。（中略）西行ばかりではない、明恵も慈円も、下つては良寛も、およそ密教系の歌僧たちは、月を單なる風流韻事の對象としてでなく、多かれ少なかれこれを心月輪の象徴として觀たのである。（中略）「わしの山」では、結局「仏法遠くに求むべきにあらず、わが心内にあり」ということを言わんとしたのであらう。時空ともに隔つた釈迦を求めものもよいが、釈迦の肉体は所詮今日にはよみがえらぬ。それよりもむしろ、自己内面の清浄なる心月輪（＝心にすむありあけの月）を顯現せしむべきだというわけである。（中略）西行はいま、皎々たる月光によつて懺悔の心を自覚した男を、心月輪の覺醒者と見ている。そのように月は、

姥捨山の名もなき男にも親しく照らし、これを開眼せしめている。したがって、月光を浴びても仏心を悟らぬ己れ自身を恨むべきであつて、月に罪があるのではない、というのである。

このように見てくると、三十三番の一对は、自然（＝月）を西行の心で染めたというよりは、はじめから西行の心そのものを歌つた歌だとしなくてはならない。しかも、その心はかなり濃密な密教思想を帯びていた。

（二二四～二二六頁 傍線但馬（以下同様））

②『聞書集』一七番歌

寿量品

得入无上道、速成就仏身

わけいりしゆきのみ山のつもりにはいちしるかりしありあけの月

←

…常在靈鷲山の釈迦を月にたとえている。（中略）…歌題句を法華經の文脈の中でみると、釈迦が、衆生をして、仏身を成就せしめるといふ意味になっている。とすると、この「ありあけの月」は、あるいは釈迦に教化されて成仏した衆生とすることも不可能ではない。（中略）彼此総合すると、この月は常在靈鷲山の釈迦であるとともに、その釈迦によつて成仏せしめられた衆生でもあるとしておくの

がよいかもしれない。

(八五、八六頁)

ここで採り上げられている三首のうち、①の二首は「鷲の山」(靈鷲山) 及び「姨捨山」―俊成の判詞から「日本の靈鷲山」を意味すると解し得る―が詠まれていることから、いずれも法華經寿量品の

我諸の衆生を見れば 苦海に没在せり 故に為に身を現
ぜずして 其れをして渴仰を生ぜしむ 其の心恋慕す
るに因つて 乃ち出でて為に法を説く 神通力是の如
し 阿僧祇劫に於て 常に靈鷲山 及び余の諸の住処に
あり

(国訳一切經『法華部』一四六頁 以下、法華經
の引用はすべて同書に拠る)

というくだりに基づいた歌であることが分かる。また②は同
品末尾の偈、すなわち

我常に衆生の 道を行ずると道を行ぜざるとを知つ
て 度すべき所に随つて 為に種々の法を説くなり 毎
に自らは是の念を作す 「何を以てか衆生をして 無上道
に入り 速かに仏身を成就することを得せしめん」と

(一四七頁)

という世尊(＝釈迦)の言葉を詞書に用いた歌であり、そこ
には①と同様に「常在靈鷲山の釈迦による衆生の済度」が詠
まれているのである。

右に挙げた寿量品の「常在靈鷲山の釈迦」のくだりの主旨
は、「釈迦は入滅したのではなく、常に靈鷲山にあって衆生
を見守っているのである」というものであり、西行はその「釈
迦」を月に喩えて詠んでいるのであるが、寿量品の本文には
かような喩えは存在せず、ために山田氏は①の二首を俊成の
判詞に基づいて「月輪觀」に依つた歌と解している。その「月
輪觀」とは『密教大辞典』に

自心は満月輪の如し、円明無垢にして其光明法界に周遍
すと觀ずる法なり (三七一頁)

と記される密教觀法であるが、そこで觀想せられる「満月輪」
は引用箇所「法界に周遍す」とあることから分かるよう
に、現実の月とは異なる「沈まぬ(＝有明の)月」であり、
以下に挙げるようにその点を詠んだ東密系の月輪觀詠も存在
するのである。

常住心月輪といへる心をよめる 澄成法師(醍醐寺)

よとともにこころのうちにすむ月をありとしるこそはる
るなりけれ

*二度本金葉集六四二、宝物集四八〇。

このことから①の二首は、密教觀法たる「月輪觀」に依つて「常
在靈鷲山の釈迦」を体现した歌であることが分かり、②の歌
も「(山の) ありあけの月」とあることから同様の性格を有
していると知られるのである。ところで、同様の例、すなわ
ち釈迦を「有明の月」や「月」、さらには「心の月」「鷲の山

の月」などに喩えた例は、以下に挙げる藤原顕輔（一〇九〇～一一五五）の

康治元年十月三日

撰政殿、舍利講之次にふみつくらせ給ひて、願成仏道（安楽行品）の心を被講に、歌もあるべし、とてめしありしかば参りて

いかでわれ心の月をあらはしてやみにまどへる人をてらさん（一二三四）

＊顕輔集一三四（詞花四一四、後葉和歌集五八三、宝物集四八一）。

という歌のように西行以前から存在しており、後述する用例の総数からも分かるように、一品経を詠んだ釈教歌の題材としてはむしろ一般的なものと言うこともできるのである。しかしながら顕教を題材とした一品経歌で、なぜ密教観法たる月輪観が詠まれているのかについては、管見の範囲では（山田氏前掲書も含めて）いまだ詳細な検討はなされていないよう、実際、右に挙げた顕輔詠も、たとえば新大系本詞花集の脚註では「心の月」について単に「悟りに至った心を月の浄澄なるに喩えた」（三五〇頁）と記すに留まっているのである。その理由は、たとえば石原清志氏が、新古今釈教部卷末の西行詠（一九七八）に関して

「釈教歌」の世界では、煩惱・迷妄・苦患等を闡、仏法・真理・悟り等を月に比喩するのは常に用いる技法であ

り、：

（『釈教歌の研究』四三三頁）

と述べるごとく、「仏法・真理・悟り等を月に比喩する」詠み方がごく一般的なものと思なされていたためと考えられるのであるが、石原氏の「常に用いる技法」というくだりには学術的な根拠の説明がなく、さらに言えば以下に箇条書きで示すように、「仏性を月輪に喩える」のはむしろ密教の誕生以降が中心となっているのである。

・『大正新脩大藏経テキストデータベース』で検索すると、「仏性」を「月輪」に喩える例は、『大般若経』や『華嚴経』などに若干用例が認められるものの、大半は『大日経』以降の密教系經典のものとなっている。

・『岩波仏教辞典』『月輪観』の項には「密教観法の成立したインドでは、精神を沈静化するには灼熱の太陽よりも清涼な月の方が適していた」（二五一頁）とある。

以上の点から、かような心月輪を詠んだ一品経歌―以下、私に「法華経系月輪観詠」とする―のありようには、密教が関わった可能性が高いと見なすことができるのである。よって本稿ではその「法華経系月輪観詠」について、もっぱら密教（東密）的な観点^②から検討、考察を試みることにする。

二、「法華經系月輪觀詠」の概略

二―一、用例の総数

ここでは前章に挙げた、「法華經系月輪觀詠」の用例数（全二八〇首）歌番号は本稿の末尾に「附録」として示す）―十五世紀後半までを対象とする^③―を、西行詠以外は『新編国歌大観』に、西行詠は岩波文庫『西行全歌集』に拠って、内容及び時代―作者の活動時期を基準とし、それが不明の場合は歌集の成立時期に基づくこととする―別に挙げることにする。なお慈円は用例数が突出して多いので、その他の歌人とは分けて挙げることにする（歌番号については「附録一」を参照）。

(一) 寿量品詠（三七首） 詞書に品名や本文からの引用などがある例）

・十一世紀前半…三首	・十一世紀後半…二首
・十二世紀前半…二首	・十二世紀後半…八首
・十三世紀前半…四首	・十三世紀後半…二首
・十四世紀前半…五首	・十四世紀後半…七首
・十五世紀…二首	・慈円詠…二首

(二) 寿量品以外の一品経詠（全五〇首^④） 選定基準は(一)に同じ）

・十一世紀前半…三首	・十二世紀前半…二首
・十二世紀後半…十首	・十三世紀前半…三首

・十三世紀後半…八首	・十四世紀前半…五首
・十四世紀後半…四首	・十五世紀…一首
・慈円詠…一四首	

←内訳（番号は「法華經一般」の①以外は品名となる）

① 法華經…四首	① 序品…二首	② 方便品…六首
④ 信解品…一首	⑥ 授記品…一首	⑦ 化城喻品…一首
⑧ 五百弟子品…三首	⑩ 法師品…二首	
⑪ 宝塔品…四首	⑫ 提婆達多品…五首	
⑭ 安樂行品…一首	⑰ 分別功德品…三首	
⑱ 隨喜功德品…一首	⑲ 法師功德品…六首	
⑳ 如來神力品…一首	㉓ 藥王菩薩品…二首	
㉔ 妙音菩薩品…一首	㉕ 普門品…一首	
㉖ 陀羅尼品…二首	㉗ 妙莊嚴王品…二首	
㉘ 勸發品…一首		

(三) 内容から一品経系の釈教歌と知られる例（全一八〇首）（一）に近い内容の歌が多い）

・十一世紀前半…一首	・十二世紀前半…六首
・十二世紀後半…一八首	・十三世紀前半…一九首
・十三世紀後半…一八首	・十四世紀前半…三四首
・十四世紀後半…一〇首	・十五世紀…九首
・慈円詠…六五首	

(四) 西行の例

・寿量品詠が六首、その他の一品経詠が二首（化城喻品、安

樂行品)、一品経詠以外の類例が五首の、合計十三首となる。

※東密系月輪観詠の十五世紀後半までの例の総数は、西行『西行全歌集』が二四首、その他(『新編国歌大観』が九五首の、合計一一九首⁴)となる(↓附録二)。

二―二、用例の濫觴及び内容的な特徴

I、最初期(十一世紀前半)の用例

「法華経系月輪観詠」の用例は、前項に示した通り十一世紀前半から見え始めるが、就中最初期の五首―いずれも勅撰入集となる―がほぼ同じ活動時期の作者の歌となっていることから、それらをもつて濫觴と見なすのが妥当かと思われる。いまその五首を、私に大意を附した上で入集順に挙げると、以下の通りである。

寿量品 (法成寺入道前摂政太政大臣〔道長〕 九

六六―一〇二七)

人めには世のうき雲にかくろへて猶すみわたる山のはの
月

*続後撰五九六(万代和歌集一六六五)。「靈鷲山の月たる
釈迦の姿は、現世に生きる者には雲のごとき迷妄のため
に見えないが、実際にはつねに住み、かつは澄んだ光を
放っている」旨を詠んでいる。

神力品の心をよみ侍りける

選子内親王(九六四―一〇三五)

さやかなる月のひかりのてらさずはくらき道にやひとり
ゆかまし

*同 五九七(発心和歌集四五)。「靈鷲山の釈迦が沈まぬ
月のごとく照らしてくれるので、衆生は皆迷わずに(仏
の)道を進むことができる」旨を詠んでいる。

前大納言公任(九六六―一〇四二)

いでいると人はみれどもよとにもにわしのみねなる月は
のどけし

*玉葉二六六八(「寿量品」題 公任集二七五、万代和歌
集一六六六)。「出たり沈んだりしているかのように衆生
は見るが、実際には靈鷲山の月は常に穏やかな光を放っ
ている」旨を詠んでいる。公任の一品経詠のうち、唯一
月輪観的性格を有する歌となる。

寿量品のところを 祭主輔親(九五四―一〇三八)

この世にていりぬとみえし月なれどわしの山にはすむと
こそきけ

*風雅二〇五四。「現実の釈迦は、月が沈んだかのごとく
滅したように見えたと、実際には靈鷲山に常に住んで、
かつは澄んだ光を放っていると聞いたことだ」という旨
を詠んでいる。

法師品 選子内親王

空すみて心のどけきさ夜中に有明の月の光をぞさす

*続後拾遺一二八五(発心和歌集三四 同集では右に挙げ

た二首のみが月輪観的な内容となる。同品では「法華經の功德で得られる神通力」がおもに説かれており、この歌は「迷妄の雲が晴れて、穏やかに観ぜられる夜に、常在靈鷲山の釈迦が沈まぬ月のごとき光を放って衆生を照らすことだ」という旨を詠んだものとなる。

これら五首はすべて在家歌人の詠であり、かつは密教系の最初の用例⁽⁵⁾ともほぼ登場時期を同じくしているのである。

Ⅱ、内容的な特徴

Ⅰに挙げた五首は、いずれも（月¹靈鷲山の釈迦）として解し得るものとなっているが、その点は後年の用例においてもほぼ同様である⁽⁶⁾。以下に十二世紀後半の例を三首、大意を附して挙げる。

提婆品の心を、女にかはりて

我もさはいつつのさはりくもはれて心の月のすむよしも
がな

*林下集（藤原実定） 三六七。提婆達多品の「女人成仏」
（二二一―二三三頁）を踏まえた歌で、歌の傍線部は「五障の雲が晴れて釈迦如来を観することができ（、成仏が叶つ）たら良いのに」と解し得る。

其又のとし二月十五夜さがに詣で、出家すべきよし
入道静蓮に契りてあひまちける程に、さてもいかが
おもひなりたると、とひにつかはしければ

わするなよわしのみ山にかくれにしそのよの月のかげを
恋ひつつ

返し

静蓮

つねにすむわしのみやまの月陰をわすれじとこそ世をば
出でしか

*寂蓮法師集六四、六五。「靈鷲山に釈迦は常在するとい
うことを忘れるまい」という旨の贈答となる。

これらの例を東密系の月輪観詠と比較すると、二つの点で違
いがあると知られる。一つは「心月輪と詠歌主体との関係性」
である。すなわち東密の場合は、たとえば『菩提心論』『三摩地』
の段に見える

此観（「月輪観」）を作すに由つて本心を照見するに、湛
然として清浄なること猶し満月の光の虚空に遍じて分別
する所無きが如し

…一切有情は悉く普賢の心を含ぜり、我自心を見るに、
形月輪の如し。何が故にか月輪を以て喩へと為るとなら
ば為く、満月円明の体は則ち菩提心と相類せり

（昭和新聞国訳大蔵經『真言宗聖典』七八―七九頁）
という記述のごとく、月輪観で観想する心月輪は「観想を行
う者自身の有する菩提心（「仏性」悟り「大日如来」⁽⁷⁾）で
あり、実際に第一章に挙げた澄成詠もそれに依って『心月
輪は常に澄んでいる』と観することによる悟り」を（「迷妄
の雲が）はるるなりけれ」と詠んでいるのである。一方で法

華経系の用例における心月輪——第一章に挙げた西行の三首は例外とする（後述）——は、たとえば慈円の

いつとなくここにすめる月のみやうき身はなれぬ友と
なるべき（拾玉集一九〇）

という歌の下句における「うき身はなれぬ友」のごとく、観想する当人とは別の存在となつてゐる——靈鷲山の釈迦と観想主体とは決して同じものではない——のである。いま一つは「観想性の有無」である。すなわち、東密系の例では

聖教^⑧の中にかきつけ侍りける

権律師実嚴（安祥寺流二代正嫡）

月の輪も心のうちにあらはれぬさとひらくるむねの蓮に

*安撰和歌集四三二。「心月輪が顕現した。心中に蓮の花が開くかのごとく、悟りを得たことである」という意となる。

心月輪のころをよみて心海上人につかはしける

按察使隆衡

むねのうちのくもらぬ月にうつしてぞふかきみのりを心とはしる

返し

心海上人（律僧 泉涌寺有縁）

むねの中にすむ月かげのほかに又ふかき御法のころやはある

*続拾遺一三七二、一三七二。「心月輪を観ずること、

仏法は我が心中にあるということを知る」旨を詠んだ贈答となる。

などのごとく、本来の月輪観のありように即して「観想による悉地」、具体的には実嚴詠における「さとり」や、隆衡と心海との贈答から窺える「仏法は自心の中にある」とする教え^⑨などが詠まれており、当然ながら観想性は不可欠のものとなつてゐるのであるが、本項で挙げた法華経系の例の多くは必ずしも観想性が認められないのである。もつとも、観想性を認め得る例が皆無というわけではなく^⑩、さらに言えば詞書に「月輪」とある例も存在する。それら二つの要素を含む歌としては、以下に示す『成尋阿闍梨母集』の二首を挙げることができる。

：月のいみじうあかきを見侍るに、よふけてゐるに、
月りんといふことのおぼえてあはれに

やまのはにいでゐるつきもめぐりてはころのうちにすむとこそきけ（一〇八）

いでゐると人めばかりにみゆれどもこ^マしのやまにはのどかなりとか（一〇九）

*直前に法華三部経及び阿弥陀経を詠んだ歌が十一首見える。

ここで作者は右の二首を、「明るい月を目にして月輪観を思い出した」と述べた上で詠んでいる。もつともその内容は、一〇九番歌の「こし」を「わし」の誤記と見なす^⑪のである

れば、いずれも「月は現実世界では出たり沈んだりしているように見えるが、釈迦たる心月輪は、つねに靈鷲山にあつて我ら衆生に光を放っている」というものとなり、「(眼前の現実の月から連想して観じた) 常在靈鷲山の釈迦」を「月」に喩えるに留まる―「自心に仏性を見出す」ような観想とはならない―ものに止まっているのである。

また、東密の月輪観を詠んだ歌に法華經系の立場から歌を返すことで、お互いの立ち位置を示そうとした贈答の例も存在する。それは、続後撰集卷十七(雑部中)に収められている西行と慈円との贈答である。

前大僧正慈鎮無動寺にすみ侍りけるころ、申しつか
はしける 西行法師

いとどいかに山をいでじとおもふらん心の月をひとりす
まして(一一三二)

返し 前大僧正慈鎮

うき身こそ猶山かげにしづめども心にうかぶ月を見せば
や(一一三三)

この贈答は、叡山の無動寺で籠山修行をしていた慈円を西行が訪うた際に詠まれたものと考えられる⁽¹²⁾。筆者は西行について「寛饒直系の東密伝法院流の行者(兼海附法)」とする立場を採るものである⁽¹³⁾が、一一三二番歌は、その大意が「心の月が澄んだ状態で籠山を継続することへの疑問」というものであることから、純然たる東密の月輪観の立場で詠

まれた歌と見なすことができる。それは、東密における月輪観の悉地が即身成仏であり、それが叶った―「心の月をすまし」得た―後は、方便を駆使して衆生を救済するのが、密教行者としてのあるべき姿となるということのためであり⁽¹⁴⁾、(西行自身をも含めて) 実際にその点を詠んだ釈教歌も存在するのである。その例を私に大意を挙げて示すと以下の通りである。

菩提心論に、ないしんみょうをもちんじやくくせず乃至身命不憍惜文を

あだならぬやがてさとりにかへりけり人のためにもすつ
る命は

*山家集八七四「衆生を救済せんとして命を落としたとしても、そのこと自体は無意味ではない。肉体が滅んだ場合は、心がすぐに仏の世界(＝悟り)に帰るのだから」と解し得る。

十住心の開内庫授宝

さとりいる十の心のひらけてぞおもひのままによはすく
ひける

*続千載集九二七(後宇多院御製)「第十住心(密教)の境地に達したことで、思い通りに衆生救済ができることよ」と解し得る。

人の、法門を月にたとへていひ侍りに

千喜久まる法名成雅

あきらけき月のひかりにたとへてぞまよはぬ道を人にし

らす

*安撰和歌集四二六「曇りのない月の光に喩えることで、妄念に迷わぬ仏道を衆生に知らしめることだ」と解し得る。

一方の慈円は天台座主をも務めた山門の高僧で、かつは台密谷流を受法した密教行者でもあり、実際に金剛界法に関する月輪観詠を詠んでもいる⁽¹⁵⁾。ただしそれ以外の「心の月」を詠んだ釈教歌は概して法華経系のものとなっていて⁽¹⁶⁾、一一三三番歌についても下句が「心にかぶ月を見せばや」となっていることから、その観想対象は信心ではなく、「靈鷲山の釈迦」であると考えられ、ために密教的な要素を持たない「法華経系月輪観詠」の立場から歌を返していると見なし得るのである。如上の点を踏まえて贈答の大意及び含意を挙げると、西行詠は

心月輪を一人澄まして、一体またどうして、山から出る
まいと思っているのだろうか（月輪観で悟りを得ている
のに、どうして山を下りて衆生を救おうとしないのか）
という、慈円のありように真言行者としての立場から疑念を
呈した体のものとなり、慈円の返歌は

憂き世に生きる我が身はいまだ山に籠もるばかりである
が、その中で観想している心の月（＝常在靈鷲山の釈迦）
をお見せしたいものだ

（自分は天台の教えに依って靈鷲山の釈迦を観想してい

るのだ）

という、自身の教学的立ち位置——法華一乗——を示したものと
なっているのである。

以上に見てきた用例の実際から、法華経系月輪観詠においては、濫觴期の段階から（心月輪＝靈鷲山の釈迦）という詠み方が完全に定着しており、東密系の用例とは心月輪の意味合いがまったく異なったものとなっていること、東密系の用例のように「観想」を必ずしも要していないこと、西行と慈円との贈答のように東密系月輪観詠との違いもある程度意識せられていることなどが知られる。また法華経系月輪観詠は東密系月輪観詠とほぼ同時期に用例が見え始めることから、両者の間には直接の関係はなかった——東密系の例から法華経系の例が派生したわけではなかった——という可能性も考えられるのである。その一方で成尋阿闍梨母集の詞書や後年の西行詠における俊成の判詞などのごとく、かかる詠み方において「月輪観」が明確に意識せられている例も存在するのであるが、そうになると、「心月輪を靈鷲山の釈迦に喩える」というありようはいつ頃から出現したのか、またそれはいかなる立場に依拠したものとなるのかということにもなるので、次章ではその点について考察を試みることにする。

三、「法華經系月輪觀詠」の教学的根拠について

三―一、經典・論書に見る心月輪と釈迦との関わり

前章第二項で述べたごとく、密教（東密）の月輪觀における本来の「心月輪」のありようは「菩提心（＝仏性＝悟り＝大日如来）の喩え」というものであったが、それと「釈迦」との関わりを密教の經典や論書などから確認すると、『金剛頂經』及び『菩提心論』に言及を見ることができ、就中『金剛頂經』は、『大日經』とともに東密の根本經典―金胎兩部―となるものであるが、この經典では「五相成身觀」で月輪觀が用いられている。これは『密教大辭典』に「此觀門は金剛界法の行用にして即身成仏の要道頓証菩提の秘術なり」（六一三頁）とある行法で、そこでは行者の悟りの過程が五段階（＝五相）に亘って述べられており、以下に挙げるように初めの三段階で月輪觀が用いられているのである。

時に菩薩、一切如来に白して言さく、

世尊如来よ、我遍く知り已んぬ、我自心を見るに形月輪の如し、と。
（通達菩提心）

時に彼の菩薩、復、一切如来より旨を承けて、菩提心を發こし已って是の言を作さく、

彼の月輪の形の如く、我も亦、月輪の形の如く見る、と。

（修菩提心）

菩薩、白して言さく、

世尊如来よ、我月輪の中の金剛を見る、と。

（成金剛心）

（新国訳大藏經本 三二―三三頁）

「五相成身觀」では、この三段階に「証金剛身」「仏身円満」が続くことで即身成仏、すなわち「行者と一切如来との一体化」が完成するのであるが、それは同時に「釈尊の成道の内容を明らかにしたもの」と見なされてもいるのである⁽¹⁷⁾。

また『菩提心論』は、『密教大辭典』に

弘法大師は密藏肝心の論にして真言修学の者必修すべき旨三学録に規定し給ひ、承和の三業度人の官符には金剛頂業者必修の随一と定め給へり。従つて東密には釈摩訶衍論と共に真言宗所学の論藏として古来盛んに学修せられ、…
（二〇五二頁）

と記されるように、東密が特に重視する論書である。その「三摩地」の段において、月輪觀で金剛界五仏とその智体（＝五智）、すなわち

大日如来（中方）…法界体性智、

阿閼如来（東方）…大円鏡智、

宝生如来（南方）…平等性智、

無量寿（阿弥陀）如来（西方）…妙觀察智、

不空成就（北方）…成所作智

を觀想すべき旨が説かれる（『真言宗聖典』七九頁）が、こ

れら「五仏」のうち、「不空成就如来」が「釈迦牟尼仏」と
 同体とせられる。そしてそれは、『密教大辞典』に「毘盧遮
 那仏の成所作智事業成弁の徳を主る」（一九〇五頁）とある
 ごとく、大日如来の働きの一端を為す存在となっているので
 ある。

三―二、別尊法における（心月輪＝法華經の釈迦）の觀想

前項に挙げた「釈尊」「不空成就如来」はいずれも「密教
 における釈迦」で、「法華經の釈迦」とは必ずしも同じもの
 ではない¹⁸⁾。しかしながら対象を「別尊法」―特定の仏や
 經典を供養する行法―にまで広げると、それに関する儀軌、
 すなわち「法華經法」や「釈迦法」「四天王法」などの次第
 において、「心月輪に依る法華經の釈迦の觀想」が確認でき
 るのである。そこで本稿では、これらの儀軌類のうち、法華
 經それ自体を対象としていることをもって、「法華經法」を
 用いて検討を行うこととする。その「法華經法」とは、『密
 教大辞典』に

觀智儀軌・威儀形色經^{ぎようしき}に依りて法華經を供養する法。
 息災・増益・延命・滅罪に修す。（中略）大法にして且

つ秘法なるが故に、已入壇の者に非ずんば伝授せず、觀
 智軌に我今依^二於大教王徧照如来成道法^一、若能依^二此勝
 義^一、修現世得^レ成^二無上覺^一と説ける中、大教王とは
 金剛頂經、遍照如来成道法とは大日經と習ひ、また軌の

中に淨三業・五相成身の印言を挙ぐるは教王經に依り、
 入仏・法界生・転法輪・五供養の印明を挙ぐるは大日經
 に依るを以て、此の經法を両部不二の秘法とす。又觀智
 軌は法華經の供養法にして、法華經二十八品を帰命する
 二十八頌を説き、以て法花^{ママ}經の功德をこの中に摂む。
 仍て台密には殊に此法を尊重す。（一九九頁）

と説明せられるような、「金胎両部によつて法華經を供養す
 る行法」であるが、そこに出て来る「心月輪による法華經の
 釈迦の觀想」を、『秘鈔』（守覺法親王輯『密教辞典』五七
 九頁に「野沢（＝小野・広沢）両流の諸尊法を類聚大成した書」
 とある）及びその註釈書である『秘鈔口決』（教舜〔醍醐寺〕
 撰）の記述から見て行くと、以下の通りである。

口伝曰。先觀大日種子三形尊形。其心月輪。觀釈迦種子
 三形。變成釈迦。所謂大日為利衆生現釈迦身也。如此可
 觀念之。最秘伝曰。先如前觀大日。大日之心月輪有バク（梵
 字 釈迦如来の種子）字。是則大日之法体也。此字變成
 鉢。同大日之三摩耶身也。變成釈迦。是則大日與釈迦令
 冥會也。（太融寺本 中卷 五十六丁表裏）

←（秘鈔口決）

次の伝は大日と釈迦と、冥会せしむと觀るが故に、本迹
 一体体用不二なれば、尤も最秘なるべし。仍て理実には
 釈迦即胎藏の大日、生身法身無二無別と習ふなり。およ
 そ顕教には久遠成道の仏と説き、秘宗には本有胎藏の大

日と談ず。

『真言宗全書』第二十九卷 一七〇頁 訓点に

従つて書き下した(以下同様)

○道場観 観想。心月輪上有八葉蓮花(割註「八分肉団即成八葉蓮花」)。花台上有 惡(梵字 胎藏曼荼羅中台八葉院における天鼓雷音仏―不空成就如来と団体¹⁹⁾―の種子)字。字變成塔。塔變成大日如来。身色如闍浮檀金。住法界定印。為利益衆生現釈迦身(割註「住智吉祥印」)出娑婆世界說法花經。此娑婆世界。其地瑠璃怛然平正黃金為繩以界。八道宝樹行列。諸台樓觀皆悉宝所成。諸菩薩衆咸處其中 (五十六丁裏)

←(秘鈔口決)

初の口伝に大日衆生を利する為に釈迦の身を現すは、此口伝の意は大日法身を以て本体とす。化身の釈迦を以て応用とす。本より迹を垂れ、体より用を起する意なり。

(二七〇頁)

また、『秘鈔口決』には次のような記述も見ることが出来る。

又云、常在靈鷲山とは、即我瑜伽宗の心のみ

(二七〇頁)

常喜院云、法華儀軌に寿量品を誦して「二十八品の中に何ぞ殊に此の品を誦すや」と。

答、此の品に説く所の釈迦の本門寿量は、大日の三世常住の義に当る。此法は大日を以て本尊とす (二七一頁)

以上に挙げた内容を簡条書きにしてまとめると次のようなものとなる。

・心月輪の上に置いた大日如来の種子が釈迦如来の種子に変わり、それがさらに釈迦如来の三摩耶形(≡鉢)を経て釈迦如来そのものと変成するさまを観想することで、顕教における「久遠成道の仏(≡釈迦)」が、密教(≡秘宗)における胎藏大日如来に該当するということを知る。

・八葉蓮花の上に置かれた心月輪²⁰⁾上の「惡」字が大日如来の三摩耶形(≡塔)に変成し、さらには大日如来そのものになるさまを観想することで、大日如来が衆生を救済すべく釈迦となつて娑婆世界に現れ、法華經を説いた―釈迦は胎藏大日如来の垂迹である―ということを知る。

・法華經法の本尊は大日如来であり、法華經寿量品の「常在靈鷲山」は大日如来の「三世常住」と同義である。

このことから

○「月輪観で大日如来を観ずる」ことが、その垂迹たる「法華經の釈迦」を観ずることにもなる。

ということが知られ、それゆえに、法華經系月輪観詠における(心月輪≡常在靈鷲山の釈迦)というありようには、『法

『華経法』などの別尊法の次第」という教学的な根拠が存在するということになるのである。〔以下下篇〕

〔下篇目次〕

四、「法華経系月輪観詠」の成立過程

四―一、実例のありように基づく仮説提示

四―二、『蜻蛉日記』に見る、在家への月輪観普及の可能性

四―三、「在家の修め得る月輪観」について

四―四、「法華経系月輪観詠」への階梯

五、おわりに

註

(1) 拙稿「月輪観を詠んだ釈教歌について ―その濫鈔及び実例の検討を中心に―」(『高野山大學圖書館紀要』第五・六合併号 以下「拙稿1」とする)。

(2) 本稿では台密を考慮に入れていないが、それは、天台宗(台密)においては、阿字観や月輪観などといった密教観法が独立した修法となつてはおらず、あくまでも台密の事相体系の一部として扱われていたため、後述する「在家への普及」が考え難いと思はれたことに因る。なお酒井敬淳氏の「台密の阿字観」(『天台学报』二〇)八三頁も参照。

(3) 対象を十五世紀後半までに限定したのは、京都を中心

とした伝統的な寺院勢力が応仁の乱などで経済的な基盤を喪失し、文化的な影響力もなくなっていたということのためである。なお松長有慶氏の『密教の歴史』二五三―二五四頁を参照。

(4) 歌の選定基準は拙稿1 四〇―五一頁に拠った。

(5) 「月輪観」とある最古の用例は後拾遺集の

月輪観をよめる 僧都覚超(九五五―一〇三七)
月のわに心をかけしゆふべよりよろづのことをゆめ
とみるかな(一一八八)

という天台(山門)僧の歌で、東密系の例と見なし得る最古の用例は続門葉集の

大師釈に褰霧見光無尽宝といへる心を

権少僧都定誓(九五八―一〇四七)

へだてつるきりのうへにて見る月は霧こそ月の光なり
りけれ(九二三)

となる(作者は高野山の僧)。なお、定誓詠を月輪観詠と見なした理由については拙稿1 三七―三九頁を参照。

(6) 心月輪を直接釈迦に準えることのできない例としては、新葉集の長慶帝御製(長慶天皇千首一九六)を挙げる
ことができる。

如是性といふ事をよませ給ける 御製

ながき夜のやみぢの雲ははれねどもとの光は有明

の月（六三三）

この御製の詞書は方便品に見えるもので、歌自体は「諸法実相」を沈まぬ心月輪に準えたものと見なすことができ、私に大意を挙げると、「衆生の迷妄は、長い夜の闇路のごとき雲のように容易に晴れるものではないが、実相の理は沈まぬ心月輪のごとく、つねに存在していることであるよ」というものとなる。なお『岩波仏教辞典』「十如是」の項（四八七―四八八頁）を参照。

- (7) 「阿字観」に関する最古の論書である『阿字観用心口決』に「阿（梵字）は月輪の種子なり。月輪は阿字の光なり。月輪と阿字とは全く一なり」とあること（北尾隆心氏の『密教瞑想入門 阿字観の原典を読む』一〇九頁）及び、梵字「阿」が胎藏大日如来の種子であることに拠った。

- (8) 『新編国歌大観』第六卷所収の本文に「聖經」とあるのを高野山三宝院本により「聖教」と改めた。なお拙稿 1 五四頁の註 7 も参照。

- (9) この二首はともに弘法大師『般若心経秘鍵』冒頭の「夫れ仏法遙にあらず、心中にして則ち近し、真如外にあらず、身を棄てて何んか求めん」（『真言宗聖典』六六頁）を踏まえていると考えられる。

- (10) 成尋阿闍梨母詠の他に観想的性格が顕著な例としては、以下の二首も挙げることができる（後述の慈円詠も同

様）。

思惟此經（『法華經』）

おもひめてこころのやみしはれぬればくもぐれにし月も見えけり

*家経集四九、続詞花集四五三。

正治百首歌たてまつりけるに

宮内卿

思ふより心のやみもはれぬべしわしのたかねに有明の月

*新統古今八三二。

- (11) 一〇八番歌は新後拾遺釈教部（一四七七）で妙音品詠と宝塔品詠との間に置かれていることから、一品経詠と解せられていたことが知られる。また一〇九番歌の四句を「わしのやまには」の誤記ではないかとしたのは、この歌を前述の公任詠の本歌取りと見なしたことに因る（「月」がないため前項の用例数には含めていない）。

- (12) 筑土鈴寛氏の『慈園 ―國家と歴史及び文學―』の年表（五三頁）に、文治五年（一一八九）九月に「西行無動寺を訪ひ慈圓と唱和」とあることから、この贈答はその際に詠まれたものと見なすことができる。なお和歌文学大系本『続後撰和歌集』の脚註（一九七頁 佐藤恒雄氏の執筆）ではこの贈答について、慈円の千日入堂の時期（一一七六―一一七九）に詠まれたものとしているが、その説には、入堂の年限が定められてい

る修行期間に西行が「山をいでじとおもふらむ」と付度することがあり得るのかという疑問があるため、本稿では採らない。

- (13) この点については拙稿「西行『観心』詠 小考一(上下)」
 (『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』三四、三五号)
 上篇七―一頁、下篇一―五頁を参照。
- (14) この典拠は『大日経』「住心品」の「三句の法門」となる。
 仏の言わく、菩提心を因と為し、悲を根本と為し、
 方便を究竟と為す (新国訳大蔵経本 四三頁)
- (15) 具体例としては、次章で扱う五相成身観の「通達菩提心」
 を詠んだ拾玉集三三八六や、金剛界五部の「仏部」を
 詠んだ慈鎮和尚自歌合六〇などを挙げることができる。
 (16) 以下に拾玉集の具体例を三首挙げる。
 わしのやまわがやまにうつる月影をつるのはやしに
 なにをしみけん (五六八九)
 月いりしわしのみ山の跡のやみにまよはぬ人も有り
 けるものを (五七〇六)
 つねにすむわしのみ山の月なれど心にうつす人ぞし
 りける (五七〇九)
 なお、慈円の月輪観詠については別途考察を試みる予定である。
- (17) 新国訳大蔵経本の補註(四〇七頁)を参照。
- (18) 『密教大辞典』「釈迦如来」の項(二〇四一頁)には「印

度の迦毗羅城に誕生し菩提樹下に成道せし生身(歴史上)の釈迦と同名なれども、此は変化法身にして、彼の生身釈迦は此尊の垂迹なりとす、而して垂迹の生身は説法教化に終始せしを以て、此尊を説法の三昧とし、大日如来の説法の徳とす」と記されている。

- (19) 『密教辞典』五一―五二頁の記述に拠った。なお、阿闍如来と自体とする説もある(『密教大辞典』一六二九頁)。

- (20) これは胎藏法の阿字観本尊と同じ形状で、梵字胎藏曼荼羅でも見ることができる。なお、註7の北尾氏前掲書 六三―六五頁を参照。

- (追) 本稿は、令和五年一月七日に開催せられた和歌文学会東京例会(於 日本大学商学部キャンパス)で行った口頭発表「心月輪を詠んだ一品経歌について」における発表内容の前半部分を文章化したものである。

〔附録二〕「法華経系月輪観詠」の歌番号一覧(重複を除く)

*原則として『新編国歌大観』所収の本文に拠り、西行のみ岩波文庫本『西行全歌集』を用いた。また、西行と慈円とについては別にまとめた。

I、西行、慈円以外の用例

一、十一世紀前半

a、寿量品詠

続後撰五九六、玉葉二六六八、風雅二〇五四

b、寿量品以外の一品経詠

続後撰五九七、続後拾遺一二八五、家経集四九

c、一品経詠以外の類例

新後拾遺一四七七

二、十一世紀後半（寿量品詠のみ）

後拾遺一一九五、千載一二〇七

三、十二世紀前半

a、寿量品詠

詞花四一五、久安百首八七

b、寿量品以外の一品経詠

顕輔集一三四、秋風和歌集五七八

c、一品経詠以外の類例

基俊集一〇四、久安百首六八七・一〇八八・一二八八、安

撰和歌集四三〇・四三一

四、十二世紀後半

a、寿量品詠

続古今七七五・七七六、新拾遺一四六二、続詞花集四五二、

今撰和歌集二二四、栗田口別当入道集二二二、法門百首（寂

然）六四、一品経和歌懷紙一九

b、寿量品以外の一品経詠

続千載九七四、新後拾遺一四七六、後葉和歌集五八五、月

詣和歌集一〇五二、林下集三六七、殷富門院大輔集九九、
隆信集九四四、久安百首五八九、安撰和歌集三九〇、唯心
房集（寂然）二二二

c、一品経詠以外の類例

続古今八〇六・八一六、月詣和歌集四七六、唯心房集（寂
然）一〇三・一〇六・一六二、殷富門院大輔集六八・一七七、

寂蓮法師集六四・六五、隆信集二〇五・九三六、久安百首
八九二、平家物語（延慶本 異本歌）二五三、宝物集四四・

四三〇、御室五十首八四六、秋風和歌集五九〇

五、十三世紀前半

a、寿量品詠

正治後度百首一五八、閑月和歌集五〇〇、露色随詠集七九、

如願法師集九二二

b、寿量品以外の一品経詠

閑月和歌集四八八・五〇一、如願法師集九二七

c、一品経詠以外の類例

続後撰六一八・六一九、玉葉二七二四、新後拾遺一四八七・

一四九三、新続古今八三二、千五百番歌合一四七九、源家

長日記一五二・一五三、新和歌集三八六・三八七、閑谷集

二四八、如願法師集九二六、紫禁和歌集一二七二、雅成親

王集五〇、実材母集三九二・七九九、後二条院御集二〇八、

百詠和歌一四五

六、十三世紀後半

a、寿量品詠

続門葉集九一八、竹風和歌抄二八〇

b、寿量品以外の一品経詠

続後拾遺一二八六、新後拾遺一四七八、風葉和歌集四九一、
閑月和歌集五〇九、中書王御詠三五・一、二十八品並九品詩
歌四〇、正和四年詠法華經和歌五・二九

c、一品経詠以外の類例

新後撰六四七、玉葉二七〇二、続後拾遺一三〇〇、風雅二
〇八二、新千載八六四、風葉和歌集四九〇、続門葉集九四
〇、人家和歌集二五〇、瓊玉和歌集四一六、円明寺閑白集
一一一、為家集一五七一、隣女和歌集一八五、雅有集二一
八、他阿上人集一八八・一九四・二二四・八五一・九四三
七、十四世紀前半

a、寿量品詠

新拾遺一四六三、新統古今八三三、続現葉集七三四、拾藻
鈔四七五、建武三年住吉社法樂和歌一一〇

b、寿量品以外の一品経詠

新統古今八六六、拾遺風体和歌集五一九、建武三年住吉社
法樂和歌一一・一二二、続現葉集七六二

c、一品経詠以外の類例

新後撰六三三、新千載八六八・八六九・八七三・八七九、
慶運法印集二八七・二八九、新統古今八三一、嘉元百首四
九五・五九四・八九四・九九四・一〇三七・一二九四・一

三九三、文保百首九八・七九八・二七四五、続現葉集七七〇・

七七一・七七二、拾藻鈔四九一、慈道親王集一八八、一宮
百首八九、詠五十首和歌（金沢文庫）三三、金剛三昧院奉
納和歌七・一四・三一・五五・六一・六九・一〇三・一〇
六・一一九

八、十四世紀後半

a、寿量品詠

続千載九六六、新統古今八三四、安撰和歌集三九四、師兼
千首九八六、為世十三回忌和歌三一・九九、経旨和歌五〇

b、寿量品以外の一品経詠

新葉六三三、宗良親王千首九六〇、為世十三回忌和歌七一・
一一九

c、一品経詠以外の類例

新拾遺一五〇三、李花和歌集八九四、李花和歌集八九四、
耕雲千首九二二、師兼千首九八九、頓阿句題百首三六四、
南朝三百番歌合二二三・二三四、正平二十年三百六十首二
九五、雲隱六帖一〇

九、十五世紀

a、寿量品詠

松下集二三〇、拾塵集一〇八〇

b、寿量品以外の一品経詠

拾塵集一〇八一

c、一品経詠以外の類例

雅世集一七七、草根集一〇四七二・一〇五〇二、続垂槐集
四九三、松下集七〇七、拾塵集一〇七八・一〇七九、雅康
集三六二 前撰政家歌合（嘉吉三年）五四一

II、西行の用例

a、寿量品詠

山家集八八八・八八九・八九〇・八九一、聞書集一七、続
拾遺一三五七

b、寿量品以外の一品経詠

聞書集八・一五

c、一品経詠以外の類例

山家集七七六、御裳濯河歌合四・一四・六五・六六

III、慈門の用例

a、寿量品詠

慈鎮和尚自歌合二九、拾玉集二四九四

b、寿量品以外の一品経詠

新古今一九五〇、慈鎮和尚自歌合一八四・一八五、拾玉集
二九七・二四五二・二四六八・二四七六・二五〇四・二五
一七・二五一八・四一九三・四四四六・四四五四・四四五
五

c、一品経詠以外の類例

続後撰一一三二、慈鎮和尚自歌合一・二七・三〇・五九・
八三・八四・一八一・一八六、拾玉集九七・一九〇・四九四・
四九七・六三六・九九五・一三七九・一三八一・一三八二・

一四九〇・一四九一・二〇〇八・二五九四・二七〇二・二
八一三・二八三三・二九一五・三〇四六・三〇六〇・三一
〇八・三一七八・三一八〇・三三二〇・三三六三・三四二
三・三四二五・三四二六・三六六四・三八六八・四二二六・
四二四七・四二四八・四三二九・四三三三・四三三五・四
三三七・四四四五・四八五九・四八七四・四八七五・五〇
五一・五〇八八・五一〇〇・五三六二・五六八六・五六八
八・五六八九・五六九二・五六九六・五六九九・五七〇五・
五七〇六・五七〇八・五七〇九・五七一〇・五七二三

〔付録二〕「東密系月輪観詠」歌番号一覧（重複は原則として

除く）

*拙稿1で採り上げた用例の歌番号（十五世紀以前まで）を、
『新編国歌大観』に拠って示した。なお西行詠は法華経系
の例と同じく岩波文庫『西行全歌集』に拠って示すことと
した。用例の採集に際しては「典拠の明確な例」「東密関
係者の心月輪詠のうち、法華経系以外の例」を中心とし、
東密とも法華経とも異なる例は対象から外してある。

第一巻 勅撰集編 三四首

金葉（二度本）六四二、千載一二一八、新勅撰六一〇、続
後撰六一七 続古今七五九・七六一、続拾遺一三七一・一
三七二・一三七七、新後撰六四八・六五三・六五四・六九
一、玉葉二七七、続千載九二五・九二六・九三一・九三

二・九三三・九九六・九九七・一〇二八・一〇二九、続後拾遺三三〇・一三〇〇・一三〇一・一三〇二、新千載八七四・八八〇・八八八、新拾遺一五二〇・一五二一、新後拾遺一四九三、新統古今八三五

第二卷 私撰集編 四首

月詣和歌集一〇六八・一〇六九、万代和歌集一六九四、夫木和歌抄一六一六五

第三卷 私家集編Ⅰ 二首

基俊集八六（続千載一〇二八の異文）、教長集八五一

第四卷 私家集編Ⅱ、定数歌編 九首

明恵上人集八八・一〇六・一〇八・一〇九・一一〇・一三六・一三七、嘉元百首四二・四四

第五卷 歌合編 歌学書・物語・日記等収録歌編 二首

南朝五百番歌合九六六、風葉和歌集五二〇

第六卷 私撰集編Ⅱ 二七首

檜葉和歌集五七一、秋風和歌集六〇三、続門葉集三〇二・六九一・九三三・九二五・九二六・九二七・九二八・九二九・九三〇・九三一・九三二・九三三・九三七・九四一、続現葉集七六三・七七三、安撰和歌集三八八・四一四・四二五・四二六・四二七・四二八・四二九・四三三・四三三

第七卷 私家集編Ⅲ 一六首

出観集七六四・七六五・七七二、禪林蔭葉集九二、露色随詠集一七・七〇・七四・七五・七六・七七・七八・八〇・

八一・九四・二七二、閑放集八五

第十卷 定数歌編Ⅱ、歌合編Ⅱ、補遺編 一首

国冬百首九九

西行の例 二四首

山家集三二一・三三二・七三三・七四二・八五三・八六八・八七六・九〇三・九〇四・一〇四一・一〇八五・一三六八・一四〇五・一四〇七、聞書集一四〇・一四一・一四二、殘集二九、御裳濯河歌合一四、六家集板本山家和歌集二、松屋本山家集二六・三一、西行法師家集九二、撰集・家集・古筆断簡・懷紙一五（続後撰一一三二）